日本宗教における旅の類型と相関
—宗教民俗学の立場から—

宮家　　準

Ⅰ．聖なる旅

一般に「日本宗教」The Japanese Religionsという語は神道、仏教、キリスト教、新宗教などを包括した言葉と受けとめられている。ただこれら諸宗教の共通面、基調音を抽出した日本教、単数の日本宗教a Japanese Religionを概念的に設定した研究もなされている。この視点に立った場合でも、いわば宗教の送り手ともいえる成立宗教の教義、儀礼、組織などの検討をもとにその構築を試みるものと、宗教の受けとめ手である庶民の宗教生活や民間信仰に焦点を置く二つの見方が考えられる[(1)]。周知のように多くの日本人は古来、産育、豊穣祈願は神社、葬式は寺院、現世利益は社寺や新宗教というように諸宗教を適宜に取捨選択して宗教生活を営んできた。私はこうした人々が生活の中に取り込んで、特に宗教と意識しないでいる見えない宗教ともいえるものを民俗宗教と名づけて、その解明を試みる宗教民俗学を提唱してきた[(2)]。それ故、本稿でも「旅」をこの立場から考えることにしたい。

旅は小学館の『国語大辞典』では「住む土地を離れて、一時他の離れた土地にいること、また離れた土地に移動すること」としている[(3)]。旅には参詣など宗教に関するものの他にも、観光、興業、営業、戦争、運輸など多様な目的のものがあるが、本稿では宗教に関わる「聖なる旅」をとりあげる。そしてこの語を日常生活に折り込まれて、それを再活性化する非日常的な聖なる営みと定義しておきたい。なお「聖」という語は宗教学の基本概念で種々の捉え方があるが、ここでは、人々に魅惑と畏怖の念をおこさせるもので、その根底には社会的なものがあるということのみ指摘しておきたい[(4)]。

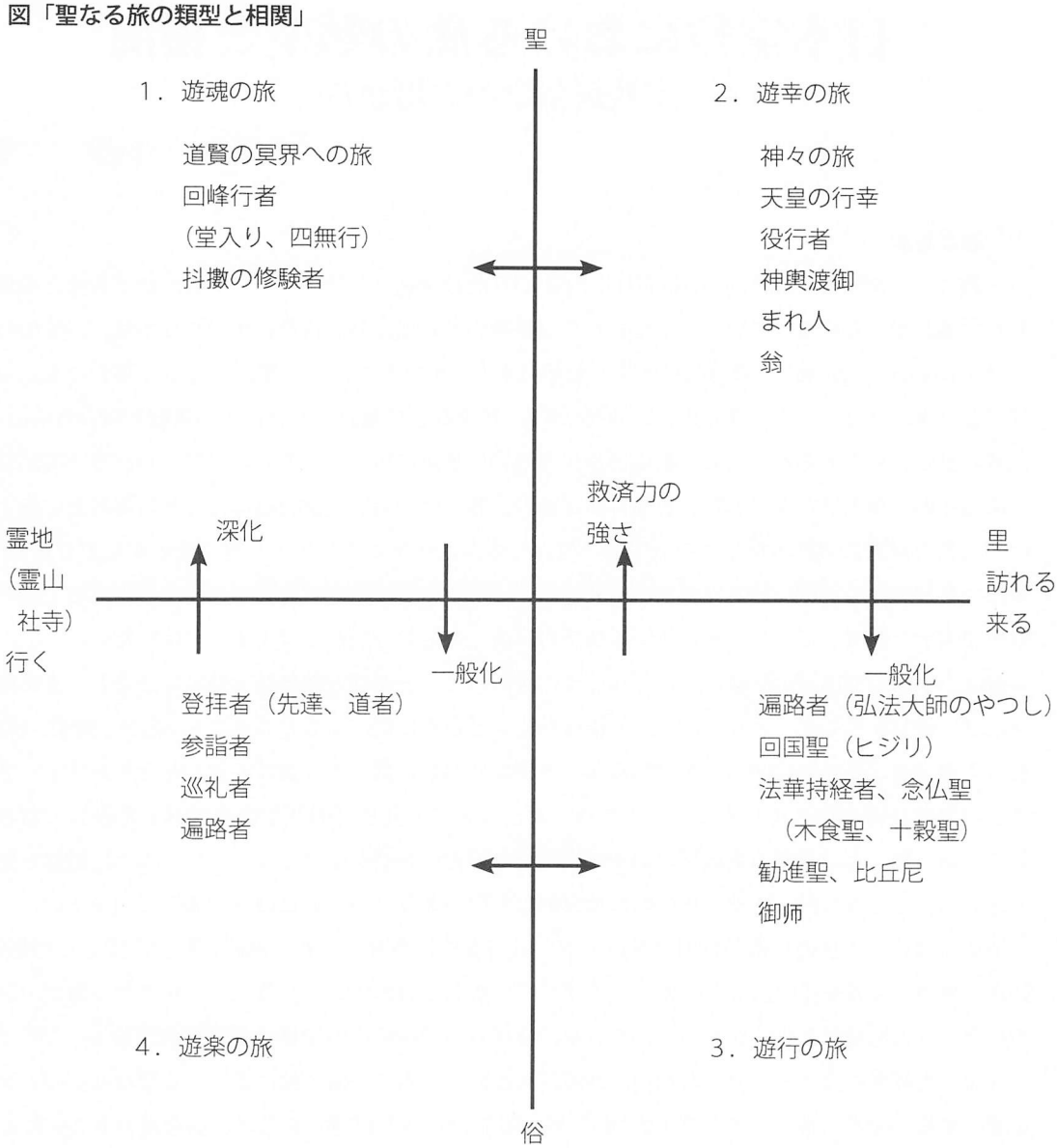
聖なる旅には山伏の抖擻や回峰、神々の旅、社寺参詣、登拝、巡礼、遍路、時衆の聖などの廻国、勧進、御師による配礼の旅など多様なものがある。聖なる旅の研究も、旅人、旅先となる霊地・霊山の社寺、旅人を受け入れる人々の側、これらの時代差や地域差への注目などの視点がある[(5)]。ただ本稿では旅の当時者に焦点をおき、時代差、地域差を超えた日本の民俗宗教に通底する聖なる旅のモデルを提示することを目的として作成した図、「聖なる旅の類型と相関」をもとに論を進めることにしたい。なおこの聖なる旅の類型図では、縦軸の上方に聖、下方に俗、横軸の左側に霊山や社寺などの霊地に行くこと、右側に里を訪れる（里人からは旅人が来る）ことを位置づけて、多種の聖なる旅をこの両軸によって仕切られた1遊魂の旅、2遊幸の旅、3遊行の旅、4遊楽の旅のいずれかに位置づけた。なお各欄に例示した旅の位置は上方がより聖性が強いことを意味している。また矢印は各類型の聖なる旅の相関を示している。

Ⅱ．聖なる旅の類型

1．遊魂の旅

「遊魂」は霊魂が身体を離れて他界に旅することを意味する語である。この類型にはこれをさらに展開させて、通常の身体活動を越えた長距離の抖擻などを通して菩提・悟りを得る旅を含めることにする。典型的な他界への遊魂の旅を記したものに道賢（905-985）の『冥途記』がある。これによると彼は金峰山の洞窟（笙の窟と思われる）で修行中に気息が断えた。彼の霊魂はその間に禅僧の姿をした執金剛神の導きで黄金が輝く金峰山浄土に行く。そこで前生が菅原道真だったという大政威徳天にあい、当時都で起った災害の原因が彼の怨念にあると知らされる。さらに蔵王菩薩の案内で醍醐天

図「聖なる旅の類型と相関」



皇が責苦にあっている地獄の状況を見たうえで蘇生するという話である[6]。これはシヤマニズムに見られる霊的な旅 spiritual journey を示すものである。現在吉野山の金峰神社の蹶抜塔では、初入峰者を暗闇の堂に入れて、心柱の周囲を回らせ、変然鐘の音で脅して「本来空の住処なりけり」と唱えさせる秘事がなされている。この「蹶抜」は「気抜」で、ここで世俗の身体から霊魂（気）を離して峰中の抖擻という霊的な旅が始まることを示すと解されないでもない。

修験道では熊野から吉野に至る大峰山を大菩提山（証菩提山）と呼んでいる。この山名は修験者が大峰山系をその間の 120 余の峰の宿で休み、また宿泊して 100 日間かけて菩提（悟り）を求めて抖擻したことに因む名称である[7]。この抖擻道の熊野側の南半分は胎蔵界、吉野側の北半分は金剛界の曼荼羅とされ、この抖擻の間に人間の成仏過程に充当した地獄・業秤（罪の重さを量る）、餓鬼・穀断、畜生・水断、修羅・相撲、人・懺悔、声聞・四諦、縁覚・十二因縁、菩薩・六波羅蜜、仏・正灌頂、の十界修行をおえることによって成仏することを目的としている[8]。なお十界のうち六道では具体的な修行を、四聖では聞法を課し、最後の正灌頂で守護仏の秘印を受けることによって成仏を確信する形となっている。これとあわせて、他界の熊野で死、子守を祀る吉野で誕生を象徴する儀礼を行なうこ

とによって、俗人として死に、峰中で菩提を求めて抖擻することによって仏として再生したことをよりリアルに体得させる仕組みになっている。なおこの大峰の峰入は密教の峰とされている。

これに対して大和の二上山から紀伊の加太の淡島（和歌山市）に至る葛城山系（大和葛城・和泉葛城）にもうけられた法華経廿八品のそれぞれを納めた廿八の経塚などの霊地を巡る法華経に因む顕教の峰の抖擻もなされている。ここでも死の山である二上山から女性の安産祈願と結びつく再生の霊地淡島への対応が認められる。そして修験者にはこの顕（葛城）、密（大峰）両峰の抖擻が求められたのである。このほか生駒から男山の石清水八幡への北峰の抖擻、京都の清水観音と関わる楊柳観音から、笠置山、奈良の東山をへて長谷寺に至る抖擻もなされていた[9]。後者は西国三十三観音巡礼の濫觴とも思われるものである。

抖擻を通して身体を極限にまで追いつめて心を鍛えて悟り、さらに成仏をはかる旅を代表するものに相応（831-918）に始まる比叡山の回峰行がある。この抖擻は比叡山の山内の霊地を拝しながら7年間かけて1000日毎夜30K歩くものである。この間700日目の回峰を終えた後に比叡山無動寺谷の明王院に9日間籠って、断食、断水、不眠、不臥で毎日10万遍不動の真言を唱える「堂入り」がある。7日目位からは死臭がただようという。さらに最後の1000日の後にはやはり無動寺で9日間断食のうえで700座の護摩を焚き、これを成就した大当行満・大阿闍梨は不動明王の直体になるとしている[10]。吉野の金峯山寺では篤信の行者が吉野山と山上ヶ岳の間を千日往復し、最後に蔵王権現を本尊とする堂内で9日間断食、断水、不眠、不臥で蔵王権現の真言を10万遍唱える四無行を行なっている。ちなみに私はこの千日行中の柳沢真悟師から抖擻中に意識を失った際、鳥となって飛翔したとの体験を聞いたことがある。

2．遊幸の旅

遊幸は「天子のお出ましと御幸」をさす語だが、ここでは広義に「神の旅」と捉えておきたい[11]。その典型は崇神天皇六年、豊鍬入姫命に託いて倭笠縫邑（三輪山檜原社に比定）に祀られていた天照大神が、垂仁天皇二五年三月、倭姫命を御杖として菟田の篠幡、近江、美濃をへて伊勢に至ってこの地に祀られ、あわせてそれに奉仕する天皇家の女性が居する斎宮が建てられたとの『日本書紀』の記事である[12]。天皇の遊幸の神話は『日本書紀』巻三の神武天皇東征譚にも見ることが出来る。その後弘文元年（672）吉野で出家していた大海人皇子がここを出て、東国に向かい伊賀をへて伊勢に入り、朝来郡の太川辺で天照皇大神を望拝した。皇子はその後美濃をへて近江、大和に入り、大友皇子を自殺させて、即位して天武天皇となっている[13]。壬申の乱であるが、この時の皇子の軍旅は遊幸に位置づけうるものである。

神の遊幸には、熊野三所権現を中国の天台山の地主神王子信が甲寅の年に、鎮西の彦山に飛来し、さらに伊予の石鎚山、淡路の諭鶴羽山、紀伊の牟婁郡切部山西の玉那木、熊野新宮神倉などを経て本宮大斎原の櫟の木に三つの月の姿で天降った神格とする「熊野権現御垂迹縁起」がある[14]。中世後期には修験道の始祖とされた役行者が7世紀後半頃に諸国の霊山などの巡錫したとの話が創られている[15]。役行者像の多くは大岩を背にして、独鈷と長い錫状を持ち、足駄をはいて木葉衣を着た姿である。これは折口信夫が「とこよ」からこの世を訪れて人々に幸を授ける杖を持ち簑笠を羽織った翁姿のまれびと神を彷彿とさせるものである。なお折口はまれびと神は時を定めてとこよから来訪する神としている[16]。テレビの水戸黄門もこれに類するものである。時を定めてという意味では、祭祀における神輿の御旅所への渡御も神の遊幸の一種と思われる。『国語大辞典』では、旅の語義の一つとして「本宮から渡御した神輿が一時留まる処」をあげている。このことは、御神幸が神の旅の身近な事例である

ことを示している。

3．遊行の旅

遊行は「宗教者が衆生の教化や修行の為に諸国を巡り歩くこと」を意味している。こうした宗教者は一般にヒジリと呼ばれ「聖」の字があてられている。このヒジリの語義に関しては、日の善悪を知り伝える「日知り」とする柳田国男説と、聖なる火を管理する「火治り」とする五来重説がある。[17] けれども『岩波古語辞典』では「ヒ」の語義を「原始的な霊格の一、活力のもとになる不思議な力、太陽神の信仰によって生じた観念」としている。それ故これに従うと「ヒジリ」は「霊を治る」と解することが出来る。本稿ではヒジリをこう解することにしたい。なお同辞典では「聖」の例として、天皇、仙人、優越した能力のある人、高徳の僧、行者、修験者、遁世回国の僧、とくに時宗の僧、高野聖、陰陽師、儒教の聖人をあげている。[18] ただこの類型３の遊行の旅では、このうちの遊行を旨とする回国の聖として、法華持経者、念仏聖、御師などをとりあげ、その宗教的性格と、聖なる旅の内容を紹介することにしたい。

法華持経者は法華経の経説を信じ、読誦、受持、解説、書写すると共に諸国を廻って法華経の信仰や書写の功徳を唱導した。特に全国六十六箇国の霊所に自らまた檀越と共に写経した法華経を納めた六十六部（六部）が弘く知られている。念仏聖は諸国を巡って念仏を唱導し、死者を弔い、供養などした聖である。念仏を唱導し、高野山への分骨をすすめた高野聖や、一遍を祖とする時衆の念仏聖の遊行が広く知られている。なおこれらの遊行聖は木食したり、十穀断ちなどの修行をしたことから木食聖、十穀聖とも呼ばれた。彼らは自己の依拠する寺社の信仰を唱導し、その堂社の建立、修復、行事の費用を得るために勧進した。この他、熊野比丘尼や伊勢比丘尼などの比丘尼が各地で繪ときなどして勧進にあたることも多かった。[19]

霊山の寺社や伊勢神宮、多賀社、津島社などの大社では宿坊から祈祷に携わる御師が各地を巡って配礼、占い、加持祈祷、登拝や参詣の勧誘を行なった。薬、茶などのものをもたらしもした。立山の置薬などは立山御師の廻檀に淵源があるとされている。御師の間ではこうした活動をする所定の地域が決まっていて、その範囲が霞や檀那場と呼ばれていた。なお個々の御師のこうした霞や檀那場の檀那は御師と恒常的な師檀関係を結んでいた。

4．遊楽の旅

類型４の遊楽の旅には主として俗人が信仰を持ってする登拝、社寺参詣、巡礼、遍路などを位置づけた。それはこの遊楽の旅に「心のびやかにやすらぎたのしむ」を意味する「楽」の要素が内包されていると考えたからである。これらについては多くの事例、それに関する研究もある故、本稿では御岳詣、熊野詣、伊勢参宮、近世の霊山登拝、西国三十三観音巡礼、四国遍路のみを紹介したい。

代表的な御岳詣には、寛弘四年（1007）の藤原道長のものがある。彼は物忌のうえで８月２日に出立し、同十一日に山上で経塚を営み、埋経している。[20] 爾来攝関貴族の御岳詣が相いついだ。院政期に始まる熊野詣は寛治四年（1090）の白河上皇の熊野御幸を嚆矢とする。上皇は園城寺の増誉を先達として、鳥羽離宮で潔斎のうえ出立され、熊野詣道の幾つかの熊野王子社などで、垢離、奉幣、神楽などをし、本宮（阿彌陀）、新宮（薬師）、那智（千手観音）に詣でられた。帰京後は使いに伏見稲荷に奉幣させ、先達を勤めた増誉を熊野三山検校に補されている。[21] 爾来園城寺の門跡が熊野三山を管轄した。中世期の熊野では宿坊、祈祷、山内案内を勤めた御師が、各地から檀那を導びいて熊野詣をした先達に檀那名と連名の願文を提出させて掌握した。そして中世後期には園城寺末の聖護院門跡が

熊野先達を組織して修験の本山派を形成した。[22] 伊勢にも多くの御師がいたが、彼らは諸国を廻檀し、道者に伊勢参宮をすすめた。道者は内宮、外宮とあわせて、神宮の奥院とされた朝熊山にも登拝した。

近世後期の富士山では、伊勢国出身の先達身禄（1671-1733）が八合目の烏帽子岩で入定して以来、富士講による登拝が盛んになり、富士吉田などの御師集落が繁栄した。[23] 木曽御嶽では尾張の覚明（1718-1786）が黒沢口から軽精進で登拝して以来多くの道者がこれに従った。その後江戸の本山派修験普寛（1791-1801）は新たに王滝口からも登拝口を開いて御嶽講の盛行をもたらした。御嶽山には各講の講祖の霊を祀る霊神碑が設けられ、その前で前座と呼ばれる先達がよりましの中座に霊神を憑依させて託宣を行なう御座がなされ、これが信仰の中核となっている。[24]

西国三十三観音巡礼は観世音菩薩が三十三の姿をとって人々を救済するとの信仰にもとづくもので、熊野三山検校の行尊（1054-1135）が始めたとされるが、これは長谷寺から那智をへて畿内の観音霊場を廻り京都御室戸寺を最後の札所としている。その後園城寺長吏の覚忠（1118-1177）が那智を一番とし、やはり御室戸寺で終る札所を定めているが、これは熊野詣後に巡礼する形をとっている。現在のように那智を一番とし、美濃の谷汲華厳寺を三三番とするのは東国からの伊勢参宮、熊野詣が盛行した室町後期以降のことである。この結果西国三十三観音巡礼は東国などから伊勢、熊野、大和、京とめぐる遊楽を兼ねた信仰の旅となった。[25] また13世紀には鎌倉の杉本寺を一番として関東をまわって、安房の那古寺を打ちどめとする坂東三十三観音巡礼が長谷寺の西願らによって始められた。さらに秩父郡内の三十四の観音霊場を巡る秩父三十四観音巡礼がはじまり、この三者をあわせた百観音巡礼が成立した。

四国遍路は高野山詣をした後、阿波に渡り、一番霊山寺から弘法大師が修行した阿波大竜寺（21-札所番号、以下同様）、土佐の室戸岬の最御崎寺（24）や津照寺（25）、伊予の石鎚山（横峰寺60、前神寺64）、弘法大師誕生の地の讃岐の善通寺（75）などを巡って、四国の大窪寺（88）を打ちどめとするもので、16世紀頃に成立したとされている。この四国遍路は弘法大師の聖跡をめぐるもので大师堂が札所になっている。ただ奥院が行場になっているものも多く、修験の影響が推測される。遍路道は海岸線にそったものが多く熊野詣の辺路の影響が感じられる。特に盛んになったのは、真念が17世紀に『四国遍路指南』などを著わして以降である。[26] なお本項でとりあげた霊山登拝、伊勢参宮、巡礼や遍路がイニシエーションとして課せられることが多かったことを付言しておきたい。

Ⅲ．聖なる旅の類型と特質

1遊魂、2遊幸、3遊行、4遊楽の四種類の聖なる旅の相互関係を旅をする当事者に焦点をおいて検討することにしたい。聖なる旅の根源とした遊魂の旅を代表する回峰行では、行者は7年目の前半の100日間は京都を行道して里人に加持を施している。なお遊魂の旅には道賢の笙の窟で籠居後の冥界の旅、回峰行の堂入り、金峰山の四無行のように、窟や堂に籠ってする苦行が、遊幸の旅の前提をなすとも思われる超自然力を得る為に重視されている。遊幸の旅の例にあげた大海人皇子も吉野に籠居し、伊勢の太川辺で天照大神を望見し、その力を得て、美濃、近江、大和で戦の旅を続けていた。そして壬申の乱で勝利後、それをもたらしたと信じた天照大神を天皇家の祖神として祀ったのである。[27] 図で1遊魂の旅と2遊幸の旅を矢印で結んだのはこのことを示している。ちなみに大海人皇子（天武天皇）と共に吉野に籠り、彼と戦の旅を共にした妃の持統天皇は在位九年間に三一回も吉野に御幸している。その理由については種々論じられているが、[28] いずれにしろ、彼女が里での遊幸の聖なる力の根源をこの吉野への旅に求めたと考えられるのである。山の神に淵源を持つ山麓の氏神の神輿が祭りの時に神社から里人を祝福しながら里の御旅所に渡御し、一夜を過した後再び本社に還御する

のはこれが一般化したものと考えられる。このことを図では１と２の間の相方向の矢印で示しておいた。

遊行の旅をする類型３の遊行の聖や御師も同様の性格を持っている。彼らの多くは里人が登拝したり参詣する霊山や社寺から里を訪れる。そして人々に霊山や社寺の御札を配り、占いや加持祈祷を行なう。そして里人を自己が本拠とする霊山や社寺に導くのである。この営みが続くうちに里人の中にも霊山や社寺と深く関わりを持つ人が現れてくる。そして彼らが講を組織して先達となって同信者を霊山や社寺に導くようになる。こうなると里にあって聖なる旅の案内をする先達、霊山や社寺にあって彼らを受け入れて、宿泊、祈祷、案内をする御師の分業が成立する。このシステムは現在の各地の旅行業者に導かれて観光地に行き、その提携旅館に泊って歓待を受ける現在の旅の雛形をなすものである。このように類型３も４も相方向の矢印で結ばれているのである。なお四国遍路などでは里人は弘法大師の聖跡をめぐる遍路者を弘法大師と崇めて接待した。また乞食に姿をかえた弘法大師が邪険にした者を罰し、親切に歓待した人に富を与えたり、村人に杖で井戸を掘るなどの奇跡を示した話も広く知られている。ちなみに天皇はヒジリとも呼ばれている。とすると里人にとっては遊幸する神や天皇も回国の聖と同様に聖なる他界から来て生活苦を救済する折口信夫のいう「まれ人神」として受けとめられていたと考えられるのである。これは遊幸から遊行への一般化である。

遊楽の要素を持った類型４の巡礼や登拝の旅を屢々くり返した宗教者がそれを極めることを目指して山に籠り、抖擻や回峰の遊魂の旅を試みることも少なくない。４遊楽から１遊魂への矢印はこのことを示している。逆に遊魂の修行をした行者が一般の巡礼などをすることもある（一般化）。以上のようにこの四類型の宗教者のあり方を全体として見ると、霊山、社寺へ行くことを示す１遊魂と２遊楽、これらの地から里への広義のまれ人の流れを示す２遊幸と３遊行は、１遊魂と２遊幸、４遊楽と３遊行が相互性を持ち、霊山や社寺までの修行の深化が４遊楽から１遊魂、里での救済活動の強さの認識が３遊行から２遊幸への矢印で示されると考えられるのである。なおこのうち前者は聖なる旅をする主体、後者は聖なる旅を受け入れる里人の心意の深化にもとづくと考えられる。

ところで私がこの類型設定にあたって「あそび」という語を用いたのは、折口信夫のあそびは広義には「広く心を慰め霄らさせる行為[29]」としていることにもとづいている。この霄らさせるは「心をさっぱりとし、さわやかにする意」である。宗教的な旅はこの類型のどれにあっても、それを行なう人に対して日常とは違う所に赴き異なった聖なる体験をすることによってこうした心意をもたらすものと考えられるのである。

注

1．宮家準『日本宗教の構造』 慶應通信　1974

2．宮家準『日本の民俗宗教』 講談社　1994、宮家準『宗教民俗学』 東京大学出版会　1989

3．『日本国語大辞典』 第一版　1981　なお本項ではその文例として『万葉集』3974「草枕多皸（タビ）を苦しみ」をあげている。以下本稿では特に断らない限り語意の引用（かぎ括弧で示す）は本辞典によっている。

4．楠正弘「聖」小口偉一、堀一郎監修『宗教学辞典』東京大学出版会　1973　459-462 頁

5．宮家準「日本人の旅」宮家準『宗教民俗学入門』丸善 2002　108-124 頁

6．「道賢上人冥途記」『扶桑略記』 25　なお宮家準『神道と修験道－民俗宗教思想の展開』 春秋社　2007　227-230 頁参照

7．「金峯山本縁記」（長承二年＜ 1133 ＞両山峰先達行延執筆）五来重編『修験道史料集Ⅱ』 山岳宗教史研究叢書 18 名著出版 1984　120-121 頁

8．『修験要秘決集』 修験道章疏Ⅱ　日本大蔵経編纂会 1919　所収

9．『諸山縁起』『寺社縁起』 日本思想大系 20　岩波書店　1975　117-129 頁　138-139 頁

10.「北嶺大廻次第－東塔巡之様」 修験道章疏Ⅲ 471-472 頁
11.「遊幸」鎌田正、米山寅太郎『大漢語林』大修館 1992 1397 頁 なお「遊幸」の概念をもとに神々の旅の伝説を分析したものに堀一郎『遊幸思想』 育英書院 1994（のちに 堀一郎『我が国民間信仰史の研究』（一） 創元社 1955 に収録）がある。
12.『日本書紀』巻 6 岩波文庫 中 67 頁
13.『日本書紀』巻 28 岩波文庫 下 316-338 頁
14.「熊野権現御垂迹縁起」『長寛勘文』 所収 群書類従 巻 463
15.『役行者本記』修験道章疏Ⅲ 所収 なお宮家準『役行者と修験道の歴史』 吉川弘文館 2000 103-119 頁参照
16.「まれびと」西村亨編『折口信夫事典』 大修館 1988 13-30 頁
17. 五来重『修験道の修行と宗教民俗』 五来重著作集 第 5 巻 法蔵館 2008 343-350 頁
18. 大野晋他『岩波古語辞典』 1974 1069・1084 頁
19. 豊島修 木場明志編『寺社造営勧進 本願職の研究』 清文堂 2001 参照
20.『御堂関白記』『大日本古記録』岩波書店 227-230 頁
21. 宮地直一『熊野三山の史的研究』国民信仰研究所 1954 97-98 頁
22. 宮家準『熊野修験』 吉川弘文館 1992 参照
23. 岩科小一郎『富士講の歴史、江戸庶民の山岳信仰』名著出版 1983
24. 生駒勘七『御嶽の信仰と登拝の歴史』第一法規 1988
25. 津野清編『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』中央公論美術出版 1990 14-20 頁
26.『四国遍路記集』伊予史談会 1981
27. 田村円澄『伊勢神宮の成立』吉川弘文館 1996 112-115 頁
28. 宮坂敏和『吉野－その歴史と伝承』名著出版 1990 114-120 頁
29. 折口信夫『万葉集辞典』折口信夫全集 6 中公文庫本 1976 27 頁